

Title	祖先柱考
Author(s)	井本, 英一
Citation	大阪外国語大学論集. 31 p.29-p.44
Issue Date	2005-03-25
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/79946">https://hdl.handle.net/11094/79946</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 祖先柱考

井 本 英 一

### Pillars of Ancestors

IMOTO Eiichi

ヘロドトスはフェニキアのテュロスにヘラクレス神殿があると聞き、海路その地を訪れた。彼はおびただしい奉納物に飾られた神殿を見たのであるが、その中でも特記すべきものは2本の角柱であった。1つは精煉された黄金でつくられ、1つは闇の中でも輝くほどの巨大なエメラルドでつくられていた。祭司の話では、神殿はテュロスの町の創設と同時に建立されたもので、今日まで2300年が経つという。ヘロドトスは、ここテュロスでもう1つ別のヘラクレス神殿を見た。この神殿もフェニキア人の建立によるものであった。ヘロドトスの考えによると、ギリシア人の間でも2種のヘラクレスの神殿があり、1方を不死の神としてのオリュンポスのヘラクレスとして祭り、他を死すべき半神ヘラクレスとして祭るが、テュロスの2種のヘラクレス神殿のことを考えると、これがもっとも正しい祭り方であるという（『歴史』2.44）。

筆者は以前、テュロスに存在した2種のヘラクレスの神殿を、エジプトの上社と下社、上賀茂神社と下鴨神社、伊勢の内宮と外宮などと比較した「上社と下社のこと」の中で、これら2つの神殿が、生死、男女、天地のような対立した概念を神格化して祭っていることを論じた。これから論じようとするのは、このような神殿の前に立っている1本、2本あるいは3本以上の柱も、神殿が祭る神格化された概念の表象であることについてである。さらに、これらの柱は、ヘロドトス『歴史』2.44のいうような祖先神の表象でもある。

ヘロドトスがテュロスで見たヘラクレス神殿は、この地の太陽神メルカルト神で、『旧約聖書』に出るパール神と同じものであった（松平千秋訳『ヘロドトス』筑摩書房、1967年、85頁、注10）。テュロスのヘラクレス神（太陽神メルカルト神）の神殿の2本の角柱は昼の表象である黄金と夜の表象であるエメラルドの柱であった。ヘロドトスは、神殿のエメラルドの角柱は、闇夜にも輝いて見えたという。新月の夜の夜光に輝くようにつくられた角柱であった。ヘロドトスはいう。エジプトを出てアジアとヨーロッパに遠征したセソストリスの歿後、その子ペロスが王位を継いだ。王はナイル川が大洪水を起こしたとき、無謀にも棺を洪水の中に投げ込んだところ、たちまち盲目になってしまった。11年目に神託があり、夫以外の男と接したことのない女の尿で目を洗えば、再び明を取り戻すと告げた。

王は自分の妃から始めて、多くの女について試み、やっと1人の女の尿で洗眼して視力を回復したので、彼女を自分の妃に入れた。王は各地の神殿に奉納品を献じたが、中でも太陽神ヘリオスの神殿に奉納した2基の石造のオベリスク（ギリシア語で、先端にピラミッドを載せた四角柱）がずば抜けていた。オベリスクは高さが45メートル、幅が3.5メートルあり、1枚の石でできていた（2.111）。セソストリスは征服地に記念柱を建てるのが例であったが、石柱には碑文と女陰の形を彫り込ませた。それは征服された民族が怯懦であることを示すためであった（2.102, 106）。私はセソストリス王が征服地の辺境に立てた石柱を見て、中国雲南省の納西族が自分たちの領域の辺境に立てる高さ4～5メートルの1対の木柱を思い出した。1本の木柱には∠形の切り込みが9つあり、柱頭には亀頭がつく。他の1本の木柱には∠形の切り込みが5つあり、柱頭には蝶が羽を広げたような女陰がつく。納西族のガイドによると∠形の切り込みは祖先を表わすという。男女によって始祖や祖先の数がちがうというのである。私は納西族の柱は天梯で、ヤコブの柱に当たるものだと思う。納西族の境界柱にはまだ男女の別が残っていて、それが性器の特徴によって弁別されるのである。日本の場合、神社の入口にある鳥居の柱は、左右の柱の直径のちがいで男柱、女柱と呼ぶ。朝鮮文化では、村里の入り口の左右に立つ天下大將軍と地下女將軍（天下女將軍）の男女の偶像によって性別が保たれている。インドでは、5世紀のコーサラ国の舎衛城に須達長者が建てた祇園精舎が残っていた。精舎の東向きの門の左右に石柱があり、左柱上には輪形をつくり、右柱上には牛形がつくってあった（『法顕伝・宋雲行紀』長沢和俊訳注、東洋文庫、1971年、68頁）。輪形は女性の象徴であり、（雄）牛は男性の象徴である。初期仏教では豊穡思想を表わすために男女の性が象徴的に用いられた。6世紀の宋雲の時代には、柱は男性を象徴し、天辺に樹葉のついた木は女性を象徴すると考えられた。韓国にも、モンゴルのオボに似たタブという石積みがある。石積みの上には木製の鳥形が安置される。タブの前には2本の高い木が立てられ、1つの柱には竜が巻きつき、他の柱の頂上には木製の鳥を止まらせる（鳥越憲三郎『古代朝鮮と倭族』中公新書、1992年、121頁）。竜は男性、鳥は女性を表象する。

エジプトの石柱は、生死、明暗のような対立概念を表わした。恐らく男（死）女（生）の別を象徴するものもあったであろう。今日、ロンドンのテムズ川河畔とニューヨークの中央公園を飾る2基のアスワン産赤色花崗岩のオベリスクは、トトメス3世（前1450年没）によって立てられたものである。これら2基のオベリスクの背後には、日中は太陽光線、夜間には自らの灯火で輝く、世界の7不思議の1つと考えられたファロスの灯台の塔がそびえていた（フィリップ・K・ヒッティ『アラブの歴史』（上）岩永博訳、講談社学術文庫、1982年、322頁）。これら2基のオベリスクは外観は同じで先端のピラミッドも差異がないように見えるが、彫刻された象形文字の碑文あるいは文様によって差異化されている筈である。もう1つの重要な特徴がある。このアレクサンドリアの2基のオベリスクは背後にある灯台の塔と合わせて3本で一体を成していたことである。塔にだけ光明の要素があった。3本柱については後に論じることにする。

柱は天と地をつなぐ天梯でもあったことは中国雲南省納西族の柱についてもいえること

である。仏が<sup>とうりてん</sup>忉利天から地上に下りる際、3つの宝階をつくった。仏は真ん中の七宝の階を下りた。梵天王は白銀の階をつくり左側に随行し、天帝釈は紫金の階をつくり右側を仏に従って下りた。仏たちが地上に下りると、3道の宝階はともに地に没し、7段だけが地上に残った。のちにアショーカ王は階段の上に精舎を建てた。その中階に仏の1丈6尺の立像をつくった。精舎の後ろに石柱を立て柱頭には獅子をつくり、柱の4辺には仏像があり、柱のどの面もよく光り琉璃のように淨らかである（前掲『法顕伝・宋雲行紀』61頁）。天と地を結ぶ天梯は3本あったことになる。真ん中の1本が主体で、左右の2本が主柱に副う形式になっている。アショーカ王の精舎には、さらに琉璃色に輝く石柱が立っていた。アレクサンドリアの灯台と2基のオベリスクの構造と似た点がある。

オベリスクを始めとする石柱、木柱あるいは天梯は、昼光と夜光、生と死、女性と男性を象徴したものらしい。オベリスクは、エジプト古王国（前2700 - 前2500）の墳墓の前には既に立てられており、第12王朝（前1985 - 前1795）の初代の王アメンエムハト1世（前1985 - 前1965）がヘリオポリスに建てた神殿の前に約20メートルの花崗岩のオベリスクが立っているが、第2代目のセンウセルト1世（前1965 - 前1920）が父王の暗殺のあと即位したときに立てたものである。1対のオベリスクと共に塔門も建てられるようになり、アメンエムハト2世（前1922 - 前1878）のレンガ造りの塔門が残っている（学研『エジプト美術』大系世界の美術3, 1972年, 杉勇解説, 162頁）。

エジプトでは墓の前に1対のオベリスクを立てた。1対の柱は対立概念の象徴であるが、死者（の魂）は対立概念の間を通過して再生すると考えられたのであろう。オベリスクの1つは生きた祖先を象徴し、他の1つは死んだ祖先を象徴した。死を象徴するオベリスクは墓中に眠る死者と同一視された。新しい死者も祖先の仲間入りをしたので祖先と見なされた。センウセルト1世が立てたオベリスクは、暗殺された父王の再生のためのものであった。1対のオベリスクは、塔門の左右の柱に変化したと考えられる。両方の柱の間の敷居は祭壇で、塔門の構造の中に取り入れられた。塔門が独立すると、門前の左右に新たに柱やそれに類する神像あるいは動物像が置かれるようになったと考えられる。

ヘロドトスという。第20王朝（前1198 - 前1085）のラムセス3世（前1198 - 前1166）が建立したヘバistos神殿の西の楼門の前に、高さ11メートルの2基の人像があった。エジプト人は北の像を「夏」、南のものを「冬」と呼んだ。夏の像には礼拝もし、鄭重に扱ったが、冬の像には全く逆のことをした（2.121）。楼門は神の家で、その前にある巨像は神の生と死を象徴する神の他<sup>アルテル・エゴ</sup>我であった。冬の像に対しては、エジプト人は罵詈雑言を浴びせ、唾を吐きかけ、汚物で穢し、棒で打ったり、石を投げたりした。

敦崇『燕京歳時記』（小野勝年記, 東洋文庫, 1967年）にいう。北京の朝陽門外2華里ばかりの所に東嶽廟がある。ここの72に仕切られた祠堂の1つに南宋の忠臣岳飛を祭った堂がある。この堂には当時の宰相であった<sup>しんかい</sup>秦檜とその妻が鎖につながれて跪座した像が別置してある。岳飛を参詣する者は秦檜像に唾を吐きかけるので、その顔形が弁ぜられなくなっている（74頁）。各地にある岳王廟には鉄柵の中に閉じ込められた秦檜夫妻の像が必ずある。2つの人像は生と死とを象徴するもので、廟の主神である東嶽大帝の他我となっ

ている。岳飛と秦檜は実存の歴史上の人物であるが、死と再生の伝統的祭祀に組み込まれた。仏教では、本堂に向かう楼門の左右に仁王像が安置される。仁王像は開口の像と閉口の像から成る。それは死と生を象徴し、2体で1体を表わす。昔は3尺はある片足のわらじをそれぞれの仁王像に奉納した。仁王像はエジプトの楼門の前に立つ像と同じもので、他方では1対のオベリスクで表現された。仏教では仁王像は木造のせいもあり、楼門の中に保護される。仁王像は本堂に祭る本尊の守護神と見なされるようになったが、始原の姿は本尊を活性化する本尊の他我であった。

ヘロドトスという。エジプトのテーバイ州にケンミスという大きい町がある。この町にペルセウスを祭った四角い神域があり、石造の巨大な楼門の傍らに石造の巨像が2基立っている。神域の中に神殿があり、その中にペルセウスの神像が安置してある。ペルセウスが神殿に現れると、彼の穿いているサンダルの片方が残っていたという。その長さは90センチもあり、このサンダルが出現するとエジプト全土が繁栄するという。ケンミスの町では全種目にわたって体育競技を催し、賞品として家畜、外衣、獣皮を出した(2.91)。ペルセウス神殿複合は、例えば奈良の大仏殿複合と同じ構造を取っている。ペルセウスの片足のサンダルは、入り口の楼門の石造の巨像のうち生に従する像のもので、このサンダルが奥の本殿のペルセウス像に穿かされたのである。ペルセウスの祭りでは、生を表象する巨像は夏の像のように丁寧に祭り、死を表象する巨像に対しては冬の像のように逆のことをした。仏教では死を象徴する仁王像に対しては、紙をよく噛んで弾丸をつくり、それを竹筒につめて吹き矢にして像に吹きつける。死を象徴する仁王を射殺し、生を象徴する仁王の新しい力を本尊に移すのである。ケンミスのペルセウスに片足サンダルを奉納してペルセウスを再生させ、町の人びとはペルセウスの力を分かち与えられた。ペルセウスの神殿の前にある2基の巨像についての儀礼はヘロドトスには見えないが、片足のサンダルのことが見えるので、生の像と死の像があったことは確かである。

金関丈夫『考古と古代』(法政大学出版局、1982年)に注目すべき論文がある。山口県土井ヶ浜の弥生時代の埋葬遺跡で、1953年以來の5年間で約200体の人骨が発掘された。第2年目の調査のとき、脚をのばしてあおむけの姿勢で葬られた体格のよい男の骨が発掘された。男の右の前腕には、他の遺骨には見られないりっぱな貝輪が2つはめてあった。この男は全身に合計16の<sup>やじり</sup>鏃を受けていた。<sup>さめ</sup>鯨の歯でつくった1本以外は、みなきれいに磨かれた石製の鏃であった。頭骨は上から重いものをうちおろして砕いてあった。この男は人びとに畏怖された呪師であったらしい。その死が非業の死であった場合、死霊は邪悪な作用をする。危険な死霊の再帰を防ぐために死体にこのような処置を施した。このような死体の1部の損傷は日本にも見られるし、世界的にも広く分布している(5-8頁)。金関はこの呪師の危険な霊が生者の世界に害を及ぼさないように死体にこのような処置を施したと見た。この死体はりっぱな貝輪を2個も右腕にはめていたし、打製石鏃ではなく磨製石鏃のついた矢を身に受けていたことから見て、何らかの儀礼が行われたことがうかがえる。200例の遺骨のうち、このような遺骨は他にない。これは死体に16本の矢を射込み、頭骨を砕いてとどめを刺したとは考えにくい。生きたまま矢を射られ、頭を割られてその

霊力を集落の長あるいは集落の住民に分ち与えたいけにえであったと考えられる。死を象徴する仁王像に唾で固めた紙つぶてを吹きつけるのはこの習俗の名残りにちがいない。金関が発掘した弥生人は悪霊を封じるために矢を射込まれたとも考えられるが、霊力を移す儀礼が終わったあと共同墓地に埋葬されたと考えられる。

神殿の前に立てられた2本の柱あるいは2体の人像は生と死を象徴するものであることが分かってきた。実際の儀礼では簡略化される文化もあったが、その特徴は保持された。日比野丈夫「墓誌の起源について」（『江上波夫教授古稀記念論集』民族・文化篇，山川出版社，1977年）にいう。中国の碑には廟門の碑と墓所の碑の2つがあった。前者は犠牲の動物をつなぐためのもの，後者は滑車をつけ縄を引いて棺を墓穴に下すためのもので，初めはいずれも木製であったという。後漢時代の石碑は数多く残っているが，墓に石碑を立てることが厳禁された魏晉時代はやむをえず小形の石碑をつくって墓中に埋めた。漢代の碑には2つの形式があり，圭首は廟門の碑，円首は墓所の碑とされる。圭首の碑，円首の碑とも中央に穴があり，円首の碑ではその上部に暈が刻されるのが普通である。前者の場合，穴は犠牲をつなぐための穴，後者の場合，滑車の軸を通すための穴で，暈は縄がすべらないよう引っかけるために刻された溝の名残りを示すと考えられている。後漢では，石碑のほかに，墳墓の近くに石闕や石柱があり文字を刻する（181-92頁）。

石碑は後漢以後見られるようになったとされるが，比較文化史的に見るとそれ以前にも祠廟や陵墓の傍らに1本あるいは2本の木柱あるいは石柱が立っていたと考えられる。墓前の石碑が禁令にあって墓中に埋められたことが史実としてあるようであるが，イスラム教徒を埋葬するとき，シャヒード（殉教者）という木柱あるいは石を死体の頭と足首の所に置いて土をかける。あるいはシャヒードを地上につくった土饅頭<sup>どまんじゅう</sup>の上に立てる。その位置は埋葬された死体の頭と足首に当たる場所である。イランでは死者の両脇に1本ずつ副える。死者は死（埋葬）の最初の夜，ムンカルとナキールという天使に審問を受けるときに立ち上がる杖にする。さらに最後の総審判のときにもこの杖にすがって立ち上がる。ウィリアム・レイン『エジプト風俗誌（ロンドン，1835年）』（大場正史訳，桃源社，1977年）によると，女性や子供の遺体を運ぶ棺の前方にだけ1本のシャヒードが立っている。シャヒードの先端にはハスの実形のものがついていて，何か供物が盛ってある。男性の墓は横に長い長方形で，頭の所と足首の所にシャヒードを立てる。頭の部分のシャヒードの先端は女性，子供用の棺台に立てるシャヒードと同じような形になっており，柱には『コーラン』の聖句と氏名と死亡年月日を彫る。足首の方には何も彫らない（267-70頁，第90図，第91図）。

女子供用のシャヒードは1本しかないが，イスラム教の世界観によるものであろう。男用の2本のシャヒードのうち，1本だけ刻文があり他は無文のままである。2本の柱に差異がある。このような碑石の対立は他の文化にも見られ，死者の再生をうながすためのものであったと思われる。中国唐の高宗とその妻則天武後の合葬陵乾陵が西安（長安）にある。乾陵の参道の入り口の左右に高い碑が立っている。向かって左側の碑には則天武后が自ら自分の功績を誇示する文章が刻んである。右側の碑は無銘のままである（陳舜臣『西域余

聞』朝日新聞社、1979年、8－10頁）。高宗の方が早く歿しているのに、普通ならば乾陵の入り口の2本の高い石碑の1つは高宗の事蹟を述べるものであらねばならない。則天武后は自分の生前に何らかの変更を加えたのであろう。日本の葬儀のさい（新生児誕生のさいも同じ）枕飯を供える。そのとき、茶碗に山盛りにした白飯に木箸1本あるいは2本を立てる。民俗学ではそれぞれの解釈があるが、新生児にしても死者にしても、柱によって再生するのである。箸2本の場合、その間に何らかの差異があったのであろうが、1本の場合と共にその経緯をたずねてみなければならない。食事のとき、似ていても揃いになっていない箸を使うのはタブーである。葬儀のとき、焼き場で死者の骨上げをするときに用いる箸はひと目で揃いでないことが分かる。不揃いの箸は不気味であるが、骨上げは粛々と行われる。死者の再生の意味が込められていたのであろう。

以前、竹原井離宮跡が発掘調査されたとき、回廊の南がわの柱は礎石の上に乗り、北がわの柱は掘立柱で地中に差し込んだままであった。鳥居の柱にも一方だけに礎石がある場合がある。平城宮の大極殿の楼閣や近くの法華寺でも礎石と掘立柱が混用される（『読売新聞』'84.12.2）。大地震のとき、この種の鳥居は倒れないといわれるが、古代西アジアに見られた神殿の前に立つ対立概念の表象と同類であると思う。柱は天と地をつなぐものである。掘立柱は天と地を何の障害もなくつなぐ。礎石は建築学上、柱に強度を与え、建造物を安定させるために発明されたにちがいないが、礎石の前身は亀、蛙、蛇、魚などで、これらの生き物は祖先獣と呼ばれるものであった。礎石の上に立つ柱は、鳥居の場合、祖先神そのものであった。掘立柱は乾陵の前に立つ無銘の柱と同じものである。塔の心柱は礎石に乗るが、礎石が土壇上にあって周囲の4本の柱と同じ水準にある場合と、心礎だけは地下にあり、心柱がそれに乗るので土壇の水準から見ると、あたかも掘立柱の観を呈する場合がある。アショーカ王の精舎は、仏が天上から下りてきた天梯7段が地上に残り、4辺を仏像で支えた上に建てられた。天地をつなぐ天梯は心柱に当たり、4辺の仏像は塔の4隅の柱に当たる。4つの仏像はそれぞれ台座に乗っていたであろう。真ん中の天梯は下部は土に埋もれていた。天梯の基部には台座に当るものはなかったであろう。塔の心礎が地下にあるタイプは、礎石上の柱と掘立掘が一体化したものであろう。心礎が他の4つの礎石と同じ水準にあるものは発展した形式と考えられる。

前述したように、漢代には廟門の碑は圭首で、墓所の碑は円首である。碑の中央に穴が開いていた。両者が地上に立つとき、どのくらいの大きさであるか明らかでないが、円首の碑の穴に滑車の軸を通して縄に棺を縛って墓坑に下ろしたというから、碑は地下にしっかり埋められていたと思われる。碑の穴は1つだと用をなさないので碑は定石どおり2枚あったと考えられる。穴に滑車の軸を入れたとするが、圭首の碑には滑車は関係ない。廟門の前の圭首の碑も2枚あったと考えられる。円首の碑は男性原理の表象であった。圭首の碑は女性原理の表象であった。雲南省の納西族のトーテム・ポールは天地をつなぐ天梯であり、男性原理と女性原理を表象することは前述した。漢代の圭首と円首の碑は、本来は別置されたものではなく、2種の碑が1体として廟門や墓所の前にあったのが、同一種が別置されるようになったのではなかろうか。圭首の碑の穴は供養する動物をつなぐための

ものという。実際にそのような習慣が圭首の碑にも円首の碑にもあったので、このような説明がされるのである。

石田英一郎は『河童駒引考』（『石田英一郎全集』5、筑摩書房、1970年、所収）の中で、J. E. ハリスンの説を紹介し、クレタ時代、雄牛狩りをしたあと牛を円柱の所へ引いてゆき、その血を刻文の上に注いだ。そのあとで犠牲獣の血を葡萄酒と混ぜて一同が飲み、法律にそむく者への呪いの文句を唱えた。有名なアヤ・トリアダの石棺上には供犠された雄牛と柱が密接に結合して出てくる（67－8頁）。石棺の絵は、死体の前で行われた儀礼で、雄牛の血を柱に注いだことを表わしている。クレタ島の雄牛と柱の祭りと同じものが中国の苗族に伝承されている。湖南省西部の苗族が行う椎牛祖先祭がそれである。椎牛とは雄の水牛を槍で刺す（椎）祖先祭のことで、秋の収穫時前に牛トーテムが子孫を訪れてくる。子孫の苗族は、水牛を槍で刺し殺し、水牛が祖霊の国からもってきた力をもらい、長寿と豊作を祈る。人びとは広場に通天神柱という飾り柱を立てる。直径40センチ、高さ数メートルもあるトーテム・ポールといえる柱である。柱にはあらかじめ直径70センチほどの輪がはめられ、水牛の鼻輪が輪につながれる。人びとは左右から牛の心臓の部位を突き刺す。牛は血を流しながら柱の周りを旋回する。牛が全身を震わせて地上に倒れると、牛の頭を切り落とし主催者に渡す。彼は自家の大黒柱に1年間この首を祭り供える（靳之林「苗族の椎牛祖先祭」岡田陽一訳『自然と文化』61号、日本ナショナルトラスト、1999年、4－10頁、多くの貴重な写真がある）。

アヤ・トリアダの柱はアラブの墓地に立つ2本のシャヒードを想起させる。レインは恐らく富裕なアラブの葬儀において、埋葬後に羊を屠り、その血を2本のシャヒードに塗る様子を目撃したであろう。W. R. スミスによると、アラビアに住んでいたアラブは、イスラム教徒になる以前からヌスブといって、石の人像あるいは石柱に神に供犠した動物の血を塗った。これらの石は、神に似せてつくられた石像で、供犠動物は人間の祖先、つまり神の若い元気な姿であった。一方、神の姿に似せて偶像をつくる必要を感じなくなったセム族は、テュロスではメルカルト神を2本の石柱の形で礼拝した。ローマ時代に至るまで、パフォスの大神廟では、メルカルト像はアスタルテ（イシュタル）女神のような人像ではなく、円錐形の石であった。このような古い形態は、塑造技術の欠如によるものではなく、神がその中に臨在する象徴が、その神の姿に似ていなければならないとは考えられなかっただけである。（『セム族の宗教』前編、永橋卓介訳、岩波文庫、1941年、254－6頁、259頁他）。

現代のイスラム教徒は年に2度の犠牲祭を行う。1つはメッカ巡礼が終わる巡礼月の10日にイスラム世界で羊その他の動物を犠牲に捧げる。また、断食月のラマダーン月が終わった翌月のシャッワール月の1日から3日までイスラム世界で犠牲祭が行われる。各家庭でも羊を供犠するが、解体者は血と脂でべとべとになった手を入り口の左右のわき柱（抱き柱）に塗りつける。血は入り口の床に撒き、住人は血の上を歩いて屋内に入る。わき柱は左右2つあるが、独立した柱ではないし犠牲動物をつなぐようになっていない。

別所梅之助『聖書民俗考』はいう。シリアのメハルデでは、嫁入りのとき嫁は門の外で



供犠された羊の血の上を通して婚家に入る。ギリシア正教徒も新教徒もそうするという。アフリカのニジェール川の上流に住むバンバラ族は、敷居の上で死者に犠牲を捧げ、その血を入り口の両側にかける。播種時に家から種をもってゆく子供は、敷居の所で先祖に挨拶する。死者の霊が敷居に宿ると信じられているからである（212－3頁）。別所が集めた事例とイスラム教徒が行う供犠は全く同じものであることが分かる。入り口の両側とそれをつなぐ敷居の聖性がどの供犠においても見え隠れしている。敷居の下に死者を埋める習慣は日本を始め世界中に見られる。敷居の下には祖先、神がいることになり、敷居の左右のわき柱は地中から湧出した神そのものとなる。祖先神は穀霊でもあるので、穀物の種がその上を通るときは、力を与えてもらうために挨拶をするのである。インドネシアのバリ島には有名な割れ木門がある。門は階段上にあるので地上と天上の境界ということが分かる。割れ門のわき柱は独立した2本の柱から成るのではなく、1本の木をタテに裂いたものである。割れ門の背後には、階段、楼門、2本の柱が見られ、拝殿はなく門を拜む古い形式が凝縮した観がある。

古代モンゴルでは、祭場の前にしつらえた2本の柱に羊肉をかけて、それを焙って祖霊を慰めたが、その祭場を靈廟といった。靈廟の前で多くの氏族集団のシャマンたちが、始祖への出自をたどって、諸氏族間の系譜関係を探り正そうとしたもので、その際、偽りの申し立てをした氏族はシャマンの口を通じて神からの呪詛を浴びねばならなかったという。『モンゴル秘史』1（村上正二訳注、東洋文庫、1970年）において村上は靈廟（ジュゲリ）の注で上記のような解説をしている。さらに、カワレフスキーの『モンゴル・ロシア・フランス語辞典』（1844年）にはジュゲリはジュクリという形で収録されており、その意味は①「シャマンによって竿の先に掲げられた羊肉」②「猥褻な冒瀆の言辞」であるという。ジュゲリは『秘史』の傍訳では①は「以竿懸肉祭天」とか「祭天処」となっている。この語の動詞形ジュクは別の個処で「呪う」の意味で用いられている（49頁）。前述したハリスンの説では、クレタ島では雄牛の血を葡萄酒に混ぜて飲み、違法者に対して呪いの文句を唱えたが、モンゴルの靈廟の前でも同じことが行われたということが出来る。呪詛と祝福は、祭儀や祈りの過程のひと駒で、2つが1体となってカオスからコスモスへ移行するのである。白川静『字統』によれば、呪は祝から分かれた字で、中国でも呪と祝は同じ字で表現された（403－4頁）。村上の注によると、ミルツォフは上のモンゴル語を古代テュルク語の動詞ユクン「お辞儀をする、敬意を払う」と同系と見なす。村上はミルツォフ説は採らないが、蓋然性がないとはいえない。2本の柱の先に肉を焙り祖霊を慰めたというのは、柱のもとで犠牲獣を殺し靈廟の祖霊を活性化したということで、犠牲獣は祖霊の他我で、新しい生命力を祖霊に注入したのである。その場で呪いと祝福の連続した唱えごとがなされたと考えられる。

ヘブライの法では、もしヘブライ人の奴隷を買うなら、彼は6年間、奴隷として働かねばならないが、6年目には無償で自由の身となることができる。主人が奴隷に妻を与えた場合、妻と彼女が生んだ子は主人のものとなる。奴隷は単身で去らねばならない。もしその奴隷が自由になる意志がない場合、主人は彼を神殿の入り口の柱の所に連れてゆく。そ

して彼の耳を錐で刺し通すなら、主人は彼を生涯奴隷とすることができる（「出エジプト記」21.1-6）。柱が供犠獣をつなぐ場所であることは前述した。柱は供犠獣と同じ祖先と見なされた。奴隷を神の柱のもとに連れてゆき、彼の耳に穴を開けるのは、牛を柱のもとに連れてゆき、鼻輪を柱にはめた輪につなぐのと同じことである。この場合、奴隷は殺されないが、神に供犠されて彼は精力を神に移す。彼は祖先で家族と考えられた。彼は神のものとなるので、主人のもとから去って自由になる必要はない。この場合、祭壇に羊、牛を主に捧げた（「出エジプト記」20.24）。主人は血と脂でべとべとになった手を柱に擦りつけて神を聖化したであろう。過越節においては、人びとは自分の家の入り口の両の柱と鴨居に血を塗った。主は柱の血を見てその人の入り口を過ぎ越した（同、12.22-3）。神を血と脂で聖別するやり方は、聖油を塗る方法に代わったと思われる。人びとはオリーブ油にミルラ、シナモン、匂い菖蒲、桂皮を混ぜて聖別の油をつくり、幕屋、祭壇、聖なる箱、祭具などに撒く。一般の人の体に注いだり、同じ割合の油をつくってはならなかった（同、30.22-33）。人間で「油塗られた者」は「聖油によって神に聖別された者」という解釈が行われる。個々の宗教ではこの解釈が妥当するが、油塗られた者の原初の姿は供犠動物の血と脂で聖化された者であろう。この考え方は恐らく研究者は誰もいかなかったと思う。神の再生には、供犠動物を剥いだ生皮をその像に被せたが、この古い習慣と血と脂を塗る習慣は同一である。季節の変わり目に動物の面をつけた祖先が子孫を訪れる風習が世界に見られるが、子孫の再生のための祖先による祝福である。このことに関しては「獣皮の禁忌」で以前述べたことがある。カトリックの秘蹟に終油（病者の塗油）がある。終油は臨終の人の定められた体の部位に聖職者がオリーブ油を塗る儀礼である。死後2時間以内は許容される。終油には教義上の解釈がある。古くは臨終の人や死者に犠牲獣の生皮をかけた。体に血と脂を塗って祖先の世界へ送り出したのである。

モーセはヘブライの民を率いてエジプトを脱出したが、シナイ山に上って神と対話しなかな下りてこなかった。民はモーセの兄アロンに自分たちを先導する神をつくって欲しいと願った。そこでアロンは民の妻、息子、娘ら全員が身につけていた金の耳輪を集め、若い牡牛の銅像をつくった。アロンは祭壇を設けて金の小牛に供物を捧げ飲食して戯れた。主はモーセに民が偶像崇拜をしていることを告げ、直ちに金の小牛を破壊するように命じる。モーセは金の小牛を焼いて灰にして水の上にまき散らし、人々に飲ませた（「出エジプト記」32.1-24）。ヘブライ人の中にはまだトーテム信仰が残っていた。移動の先頭に立つのは祖先神、トーテムとされた。一神教になったあとにもこの信仰が残っていたのである。トーテムはヘブライ人が400年間奴隷の苦役を強いられたエジプトにもあった。エジプトの行政区である各州には州を代表する祖先獣がいて、その州の民の行列では、高い竿の先に設けた板の上に該当動物の剥製あるいは毛皮を載せたスタンダードと呼ぶ旗が先頭に立った。イスラエルの民はモーセが焼却して撒いた水を飲んだとある。トーテムを食べる習慣が、一神教化したヘブライ人の間に牢固として残っていたことを窺い知ることができる。

ヘブライ人は石柱と木柱を一神教化したあとも信仰し、神の怒りに触れることがしばし

ばあった。石柱はマッセーバーといわれ、古くは自然石の塊であった。自然石はやがて人間の手が加わり石柱に進化する。木柱はアシェラーと呼ばれ、女性像をしていた。アシェラーはアスタルテ／イシュタルと同じ系統のことばで、女神を表わす。聖所の前に石柱と木柱が立ち、その間に祭壇があった。日本でも古い形式の鳥居は、左右の柱の間に祭壇である平たい石が表面を出して埋めてある。イスラエルの石柱マッセーバーは、女性の表象であるアシェラーに対し、単なる円柱あるいは自然石であったが、男性を表象した。円柱をそう考えるようになったのであろう。朝鮮文化では、村の入り口のような聖と俗の境界に天下大將軍と地下女將軍が立つことは前述した。男性は天神であり、女性は地母神であった。それは天と地の境界でもあった。古代のイスラエルでは、高い所（バーマー）で祭儀が行われた。高い場所は自然の丘であったり、人工の高みであったりしたが、頂上は天にいちばん近く、集落と田畑を見下せる場所であったので、祭りの場としては最適であった。そこに神を呼び下ろし、集落と田畑に祝福を受けたのである。日本の国見と関連する。

ソロモン王の死後、その子レハブアム王に反旗を翻して北王国を建てたヤロブアムは金の小牛をつくりそれを祭った（「列王記」上、12.28-9）。彼は他の神々や鋳物の像をつくり主を怒らせた（同、14.9）。さらに王はアシェラー像をつくって主の怒りを招いた（同、14.15）。ユダの王レハブアムもあらゆる高い丘と茂った木の下に聖なる高台を築き、石柱、アシェラー像を立てた。その地には神殿男娼さえた。彼らは主がイスラエルの前から追い払われた諸国の民の全ての忌むべき慣習に従った（同、14.23-4）。ソロモンには700人の王妃と300人の側室がおり、彼女らが持ち込んだ異国の神々の信仰を取り入れたので主の怒りを買ひ、父ダビデのように主に従わなかった（同、11.3-6）。ダビデ王の死後イスラエルは崩壊の道をたどったが、律法が禁ずる偶像崇拜が盛んに行われていた。

イスラエルには、これら2本の聖所の前に立つ石柱や木柱のほか、ソロモンの神殿の前に立つヤキンとボアズという中空の青銅の柱があった。「列王記」上、7.13以下に、フェニキアのティルスの人ヒラムにつくらせた神殿の詳細が見られる。青銅の柱は2つとも同じもので、高さ8メートル、周囲5.4メートル、直径1.7メートルあった。天辺には2.2メートルの柱頭をつけ、網目文様と格子文様をつけ、200個のザクロの実を2列に並べた。柱頭の下には円環がめぐらされていた。神殿の前に、ヒラムは直径4.5メートル、高さ2.2メートルの青銅の鋳物の海をつくった。この海は12頭の牛の像の上に乗っていた。柱頭の上には1.8メートルのユリの花がついていた。左右の柱はいずれも同じ形であった。しかし、これらの栄華を極めたソロモン王の神殿も、ゼデキヤ王の治世にバビロンの王ネブカドネザル王に破壊され、青銅は破砕されてバビロンに運び去られた（「エレミア書」52.1-23）。

神殿の前の2本の柱は左右同形であった。ユリの花は女性を象徴し、柱頭とその下の円環と柱の本体は男性を象徴している。イスラム教のモスクの入り口にある光塔の頭部を（バラの）花と呼ぶが、古い伝統を受け継いでいる。柱の傍らの海を支える雄牛は、他の文化に見られる柱につながる牛を想起させる。マッセーバーやアシェラーのような石柱や木柱には、牛や羊の犠牲獣を解体したあと、血と脂を塗りつけたが、ソロモンの神殿の

青銅の柱にも同じようなことが行われたと考えられる。中沢洽樹「続・エデンの園の二つの樹」（『日本オリエント学会創立三十周年記念 オリエント学論集』刀水書房，1984年，所収）によると，ソロモン神殿のヤキンとボアズの2本の柱は，グデア神殿の2本の聖木に対応するほか，エデンの園の生命の樹と知識の樹とも対応する。このような聖木の傍らには驚の顔をした守護神が立っていたり，魔除けの像として現われる（483-93頁）。

宋雲はカニシカ王の雀離浮図について記す。仏が涅槃に入って200年後，仏の予言どおりにカニシカ王が現れた。王が出遊したとき，4人の童子が牛糞を重ねて高さ3尺ばかり9塔をつくるのを見たが，突然童子はいなくなった。王はこの塔（浮図）をつくって糞塔を覆った。すると糞塔はますます高くなって塔を突き破った。糞塔の成長が止まったので，塔の建設も終わった。糞塔は塔から抜け出て塔の南に立った（『法顕伝・宋雲行記』206-8頁）。ここではカニシカ王がつくった塔と，天人童子がつくった糞塔の穢と聖の塔が描かれている。カニシカ王は塔ができ上がったとき，真珠でもって網をつくり塔を覆った。数年たって王は真珠の網をはずして銅壺に入れ，塔の西北100歩の所に埋納した（前掲書，208頁）。ソロモンの青銅柱はその先端をザクロの実のついた網で覆ったが，カニシカ王伝説では真珠のついた網で覆う。このモチーフは仏教では好んで用いられ，浄土の聖樹はいつもこの種の網で覆われる。紀元前10世紀のソロモン王の神殿を設計したのはフェニキア人ヒラムであった。当時の東地中海周辺の諸文明の1端がカニシカ王の大塔の伝説の1部に取り入れられたのであろう。

法顕は記す。アショーカー王は7塔を壊し8万4000塔をつくった。最初につくった大塔は王城の南3里余の所にある。塔の前に仏足跡がありそこに精舎があるが，戸の北が塔に向かっている。南には1つの石柱がある。石柱の周囲は1丈4～5尺，高さ3丈余りである。塔の北3～400歩の所に，アショーカー王がつくった泥梨城があり，その中央に石柱がある。これも高さが3丈余りで上に獅子がある（前掲書，98-9頁）。アショーカー王の大塔と石柱は南北軸の上であり，大塔の前に仏足跡がある。ソロモン神殿のヤキン柱とボアズ柱も南北軸の上にあるので，何か意味があるのかも知れない。中間にある仏足跡（仏足石）は祭壇で，この形式もよく見られるものである。大塔というのは，訳者注のいうような阿育寺そのものなのであろうか。精舎が阿育寺で，大塔は巨大な方形のジグザグで，基礎の下に仏舎利を納めたのではなかったかと思う。インドの仏塔は一般に高さは20メートルはあり，最上段の中央には直径30センチほどの穴が開いていて，円筒は地下にまで伸びている。穴に小石を投げると数秒して地下に石が落ちた音が返ってくる。中空の円筒と石柱が対になっている。木造の塔の場合は，仏舎利を埋納した地下から心柱を立てる。木柱は中空ではないが，石柱と対になるとヘブライの伝統であるマッセパー石柱とアシェラー木柱の対と対応する。カニシカ王の塔と糞塔の対は，穢と聖の対立観念の表象であるが，他方では石と植物性の塔の対立になる。

石柱の柱頭に獅子が見られるのは，単なる荘厳ではなく，獅子を祖先獣と見て柱のもとで供犠した名残りではないかと考えられる。ペルシア帝国のペルセポリス宮殿は，国内ばかりでなくレバノンやイオニアなどからも資材や設計者，職人を入れて建設したことが碑

文に見られるが、宮殿の梁を受ける石柱の頭部は、馬や雄牛などの前軀の像である。クレタ文明で見られたような柱のもとでの供犠の名残りと考えられる。中国内モンゴルのオールドスでは、包の南に先が3つに別かれた竿を立て、呪文と馬の絵を描いた小さい旗を柱頭に結びつけ、毎日香を焚いて礼拝する。小旗を「風の馬」(ヒーモリ)と呼び護符とする(A. モスタールト『オールドスロ碑集』磯野富士子訳、東洋文庫、1966年、96, 102頁)。前掲書では、包の前の祭壇に立てたヒーモリを吊した長い竿の写真を見ることができる。モンゴル共和国では目にすることができなかったが、この伝統はあったと考えられる。モンゴル人の供犠獣は馬であった。小旗に馬の絵が描いてあるのが現在の形であるが、古くは供犠した馬の生皮を竿の先から吊したのであった。竿が祖先獣、祖先神を象徴するので、竿に祖先獣の生皮を吊して、それを祭る包の人びとに活性を与えようとするのである。

北京の天安門の前後にそれぞれ1対ずつある華表は白玉の円柱で、柱頭に望天<sup>ほうてん</sup>犼という獅子に似た獣の石像がうずくまっている。この獣は、皇帝が外遊の折の行為を監視しているといひ伝えられている(金受申『北京の伝説』村松一弥訳、東洋文庫、1976年、226頁)。柱頭にいる犼は想像上の動物であるが、清朝皇室のトーテムであり守護神であった。この動物は、体の一部に孔があり、その延長が地底に及ぶものだったらしい。1対の華表は同じものである。石柱にも孔があったと考えられる。清朝では、華表の所で訴状を受けたので、この場所が皇帝と民との境界であるという意識があった。古代西アジアの美術に、帝王の獅子狩りをモチーフとしたものが見られる。獅子に限らず、猪や鹿その他の野生獣を帝王は季節の変わり目に狩猟した。現代においても、イランのパハラヴィー王朝では定期的に王室領の狩猟地で狩猟が行われた。パハラヴィー王朝の前のカージャール王朝では、狩猟した動物の肉を欧州の大使館に贈与する習慣があった。帝王の狩猟はスポーツ化した観があるが、必ずしもそうではなかった。トーテミズムの観念は消失したかも知れないが、節目節目に野生動物を殺すことによって、動物がもっている活力を身につけるという観念はまだ残っていた。野生動物が死後の人間の魂の化生したものであり、彼らが節目節目にこの世を訪れてきて、子孫の人間を保護し、彼らに栄養を与えて再生させるという観念は説話や民間伝承で伝えられた。古代ではこの観念はもっと強かった。前14世紀のハッティ(ヒッタイト)王国の首都ハットゥシャシュ(ボアズキョイ)は2重の城壁をめぐらしていたが、外壁と内壁の間に「獅子門」として知られる左右1対の石柱が残っている。それぞれの自然石に手を加えた石柱の前面下部に獅子の前軀が出ている。この門の近くには高い塔が築かれていた(学研『古代西アジア美術』大系世界の美術2、1975年、図版111、林良一解説、279-80頁)。学界では柱から前軀を出した獅子を守護獣と見るようであるが、それに限定する必要はない。柱の柱頭や根もとに獅子や牛馬を配する形式が広く見られるが、獅子だけに限れば守護神と断定することができるが、発生的には祖先の表象である柱に、祖先である野生獣を供犠し、柱にエネルギーを与え、間接的に2本の柱の間に祭られる神を活性化したのである。神の位置は帝王、部族の長、家の主人、新生児、死者…によって代替することができた。

イスラム教のモスクの入り口に光塔が左右2つある場合と1つしかない場合がある。さらには4方に4本ある場合もある。光塔は塔の内部に設けられた螺旋階段を通して頂上の花に上り、役の者が人びとを定時の祈りに誘うアザーンを唱える。塔は内部が螺旋の中空になっている。ソロモン神殿のヤキンとボアズの青銅柱は中空であった。塔とモスクの入り口の左右が三位一体となるのか、入り口の2つの塔と礼拝場（モスク）が一体になるのか、入り口の両側の柱と1つの塔が三位一体になるのか、さまざまな変異形式があるように思える。紫禁城の華表は天安門の前後に1対ずつあるので合計4本ある（前掲、金受申『北京の伝説』226頁）。華表は1本の場合もある。インドシナ<sup>チヤンスン</sup>の山岳民族モーケン族は善霊と悪霊を信じていて、善霊のために5メートル以上の柱が2本彫刻され、質素な聖堂の横に立てられる。シャマンは善霊たちに、これら美しい柱を棲み家とするよう誘い、彼らに供儀する。同様にそれより小さい柱が2本立てられ、悪霊の自由にまかされる（ベルナツィーク『黄色い葉の精霊』大林太良訳、東洋文庫、1968年、32-3頁、写真と共に）。ソロモン神殿のヤキンとボアズの青銅柱のほかに、マッセーバー石柱とアシェーラー木柱の2つがあった。それは新文化の象徴と旧文化の象徴が共存したのか、先住民族の象徴に新来民族の象徴が重なり、それぞれが別個に従来の慣習に従い、あるいはそれぞれが並存して新しい形式を生み出したのではないかと考えられる。

朝鮮文化には石長柱（石長生）と木長柱（木長生）の別がある。新羅から高麗<sup>チヤンスン</sup>には長生標柱のほかに長生標塔の名称があったので、柱の形のほかに塔の形のものもあったらしいことが分かる。塔形のものは今日、堂山とか造山という積み石の聖所で、モンゴルのオボのような形のものという。2本ある長生標が多いが、1本の長生もある。木偶の代わりに石像のものもあり、立石もある。これらの長生の形式はさまざまで、村の入り口に立てられるが—その代表は天下大將軍と地下女將軍である—そのほかに、これら長生の傍らに、鳥を止まらせた鳥杆が1本立っている例や、2本の鳥杆の間に長い長生が立っており、その根もとの両側に2つの小さな人形<sup>ひとがた</sup>を配したものがある。朝鮮文化の場合、北方から何波にも分かれて同系統あるいは異系統の文化が長い期間にわたって流入してきたと見られるので、旧文化と新文化、先住民族と新来民族の区分をすることが困難な場合がある（秋葉隆『朝鮮民俗誌』名著出版会、1980年〈1954年〉、金烈圭『韓国民間伝承と民話の研究』依田千穂子訳、学生社、1978年、267-70頁）。

イスラム教のメッカ巡礼者は、巡礼月である12月10日の早朝、ミナーの谷にある3つの石標のうち、メッカにいちばん近い最大の石に7個の小石を投げ、翌日からまん中にある2番目の石に、さらに1番目の石に毎日7個の小石を投げる。1番目の石は大悪魔の石と呼ばれ、石は唱えごとと共に悪魔に投げられる。柱は小石の石積みの中心に立っており、形式的に石積み（ケルン）の上に立つ木柱や石柱と同類である。小石が石柱を埋めつくさないように管理されている。メッカにあるカアバ神殿の内部には3本の12メートル余りの木柱が立ち天井を支える。傍らに木の梯子があり、天井の一角に達する。そこを押上げると天井（屋根）に出られる。3本の柱は、前イスラム時代の3柱の女神を象徴するという伝承がある（M. S. ゴードン『イスラム教』奥西峻介訳、青土社、1994年、25頁）。

カアバ神殿の四角い、高さ2メートル余りの床は土と石を固めてつくった祭壇で、3本柱はその上に立った形になっていた。屋根も側壁もない最初期のカアバはもっと小型の土壇と3本の木柱であった（T.P.ヒューズ『イスラム辞典』ニュー・デリー、1976年〈1885年〉；H.A.R.ギブ、J.H.クレイマーズ『イスラム小百科辞典』ライデン、1953年；グスタフ・E・フォン・グルーネバウム『イスラームの祭り』嶋本隆光監訳 伊吹寛子訳、法政大学出版局、2002年；黒田壽郎編『イスラーム辞典』東京堂出版、1983年）。

カアバ神殿の中の3本の木柱とミナーの谷の3本の石柱は、ヘブライ人のアシェーラー柱とマッセーバー柱に対応する。インドシナのモーケン族の善霊の高い柱と悪霊の短い柱とも対応する。ヘブライの宗教から出たイスラム教では、石柱と木柱に悪霊と善霊の象徴がある。木柱がイスラム教でも女性原理を象徴するのは、前イスラム時代の伝統であろう。カアバ神殿の儀礼とミナー・ムズダリファ・アラファートの儀礼は、前イスラム時代は個々に独立した儀礼であったが、イスラム時代に入ってから、この2つの儀礼を一体化したという考えに立てば、石柱は本来は悪魔ではなかったかも知れない。石を投げる行為が悪魔の排斥のためとされるようになったのは、前イスラム時代にもあったかも知れないが、祝福する行為の逆転した形ではないかと思う。立春の前日の節分の夜、豆まきをして鬼やらいをする。鬼が豆に当たって逃げるというのである。ローマでも旧スタイルの新年の前夜である5月9日の夜に黒豆を祖霊に向かって顔をそむけて投げた（オウィディウス『祭暦』高橋宏幸訳、国文社、1994年、200頁）。鵲外の「追儼」にもこのことが言及してある。豆まきは祖霊を追い払うのではなく、その夜（新年の始まり）あの世から帰ってきた祖霊をわが家に導き入れるのである。祖霊は子孫の年の数と同じ古い魂を表わす黒豆を拾って食べ、子孫の家を訪れる。祖霊は正月の間子孫と共にあり、またあの世に帰っていった。やがて祖霊は鬼と混同され、豆まきは鬼やらいに発展する。中国文化の追儼は発展形である。スピルバーグ監督の映画『シンドラのリスト』の最終場面で、生き残ったユダヤ人たちが、シンドラの平たい墓石の上に1つひとつ小石を乗せてゆくのがあった。個人が捧げる小石はその人の魂であり、「鬼やらい」で投げる豆と同じものである。自分の年の数ほどの古くなった豆を祖霊に食べてもらうのが本来の姿である。ミナーの谷で石投げをする前、巡礼者は犠牲を捧げ、正午過ぎに大悪魔の石柱に投石した（前嶋信次『メッカ』芙蓉書房、1975年、25頁）。ミナーの谷では、参詣者は一様に小石を7つ投げる。アラブ世界では7はお目出度い数で、悪魔とは関係ないのである。ミナーの柱自体が、前イスラム時代からの祖先柱で、参詣者は自分の古い魂を祖先に食べてもらい、祖先からは新しい活力をもらって新しい年を迎えた。ミナーの3本の石柱は大中小の大きさになっている。大がいわば本尊に相当し、中小の石柱は多くの文化で守護神に発展した祖先柱（神像）であろう。日本の節分の豆まきについては、真矢都『京のオバケ』（文春新書、2004年）にすぐれた叙述が見られる。

日本では、弥生時代のソロモン神殿と同じ形式の神殿と見なされるものが、大阪府池上曾根遺跡で発掘され復元されているが、1本の心の御柱と2本の棟柱を支える<sup>うずばしら</sup>宇豆柱が神殿の祭祀の中心となっている。同じことは平安時代の出雲大社（48メートル）の本殿下の

心の御柱と棟柱を支える宇豆柱についてもいえる（萩原，前掲書，19頁）。大師講の粥には不揃いの長い箸を3本出す。その理由は，大師には子供がたくさんいるので，いちいち近寄って食べさせることができない。そこで長い箸を使って食べさせたという（宮田登「大師信仰と日本人」和歌森太郎編著『弘法大師空海』所収，雄渾社，1973年，88，92頁）。枕飯に箸を1本あるいは2本立てる風習と骨上げにおいて2本の不揃いの箸を用いる風習は前述したが，3本の不揃いの箸もここで紹介しておく。日本ではかつて広く行われた土葬で，土饅頭に節を抜いた青竹を1本立てた。臨月の女性の死体を埋葬した際，地中から赤ん坊の泣き声が聞こえてきたので，掘り出して赤ん坊を育てた話が民話や高僧伝のたぐいに語られている。青竹を2本立てる埋葬法もあった。これも臨月に死亡した女性の墓で，飴を買いに幽霊が出入りしたと語られる。竹筒は中空になった柱であるが，もとは死者を再生させるための祖先柱であったと思う。死者の装束には死出の旅路につくための杖を左脇に副えたものである。3本柱の伝統が変容したものと考えられる。京都太秦の広隆寺に付属した，京都最古の神社といわれる木嶋坐天照御魂神社<sup>このしまにいますあまてるみたま</sup>には，小さい池（湧水）の中に小石の石積みがあり，高さ60～70センチの木が3本立っている。3本は三角形の等辺をなして立っていて，笠木と貫で隣の柱とつながっている。

日本家屋にはA，B，C 3つの大黒柱がある。Aは家の土間と座敷の中間に立つもので，Bは土間に立ち，かまどの傍らに立つ。Cは例えば田の字型4間の座敷なら，4間の中心部に立つ。上棟式ではAの大黒柱に簀と笠を吊す。大黒柱の祭りには，夷<sup>えびす</sup>大黒を祭る風習もあった（民俗学研究所『民俗学辞典』東京堂，1951年，339－40頁）。上棟式の際にAの柱に簀笠を吊したのは，A柱を人格神と見ていたからである。この神は祖先神で，子孫と共にいつもいるものとされた。あるいは3本の柱は来訪神の表象で，お目出度い上棟式に来訪し，子孫に祭ってもらって飲食を供されたあと帰ってゆくとされた。来訪神は夷神と称され，異界から訪れる祖霊であった。A柱は境界神であり，家の主人とも同一視された。B柱とC柱はA柱の両側にあってA柱を活性化し，主人とその家を繁栄に導いた。日本家屋の3本の大黒柱は，カアバ神殿内の3本の木柱（イブンパットウタ『三大陸周遊記』前嶋信次訳，角川文庫，1961年，56頁によると，チーク材の高い円柱が3本，4歩の間隔をとって中央部に立っているとある）と同じように境界柱でもあった。朝鮮文化では八角形柱が3本，前室と後室の間を横切るのを見る。1949年北朝鮮で発見された高句麗古墳では，前室と後室を3本の八角柱が仕切る。柱の柱頭にはそれぞれ種類のちがった祖先獣と考えられる怪獣の頭がついている。

慈覚大師円仁は開成5年（840）5月20日，五台山の巡礼を始めた。中台に到り頂上に上るが，頂上に近く則天武后が建てた3基の鉄塔があった。屋根も相輪もない，鐘のようなもので中間の1塔は四角，高さは3メートル余り，両辺にあるものは高さ2.5メートル余りあった。円仁は5月22日，諸台でも同じ鉄塔3基を見ている（円仁『入唐求法巡礼行記』2，足立喜六訳注，塩入良道補注，東洋文庫，1985年，33，38，47－8頁）。五台山の5つの台は，巨大な祭壇であると同時に死者の眠る墳墓の象徴であった。イランのシーア派の墓の土饅頭には，1本の棒を挿し込んで立ててある。棒の先頭から，死者の白い衣類



をタテに裂いた何本かの布切れを垂らす。発生的には祖先獣の毛皮を細長く裂いたものである。この棒と墓中の死者の両脇に副えた2本の棒（ジャリーダテイン）を合わせると3本の棒になる。A. J. ハーンサーリー、サーデク・ヘダーヤト『ペルシア民俗誌』（岡田恵美子、奥西峻介訳注、東洋文庫、1999年）によると、ジャリーダテインは死人の松葉杖と訳され、死人の両脇の下に置く2本の小枝である。小枝はヤナギ、ザクロ、イチジクなどの生木を適当な長さに切ってつくる。ゾロアスター教徒を髣髴とさせる習俗である（174, 177頁）。

3本柱の意義について土居光知は次のようにいう。祭壇と<sup>かなえ</sup>鼎の3脚は天柱の観念にもとづく。エジプト、クレタ時代には、天神に捧げられる食物は、1本の天柱の上に載せられたが、クレタ後期のもの、ミュケナイで発掘された土器には3脚の机の絵が見られる。これは天が極東、中央および極西にある3つの巨木あるいは天柱によって支えられているとする想像にもとづくものである。アポロンの神託で有名なデルポイでは、神に捧げる食物は天上の神座としての鼎が用いられた。デルポイの神託においては、巫女がアポロンとして鼎に座り神託を宣べた。3本の柱に支えられた鼎は天上を表わし、これによって煮られた食物は神聖化され、その上に座る人は神聖化された。中国にも3柱の思想があり、鼎が祭器として用いられた（『古代伝説と文学』岩波書店、1960年、383頁）。比較文学の先駆者であった碩学土居光知は、分析の方法を用いなかったが、不十分ではあるが肯綮にあたる結論に達している。

(2004. 12. 9 受理)